

ヒヌマイトトンボ *Mortonagrion hirosei* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は75%、現存数1であり、絶滅危惧 I B 類に相当する。

ただし、本種のランク評価後に唯一の産地の現地調査を行った結果、本種を確認できず、その結果を元にとすると、絶滅率88%、現存数0.5になる。今後の調査を含めて次回ランクの見直しを検討する。



♂. 飛島村, 1984年7月8日, 清水典之 撮影

【形態】

小型のイトトンボで、♂の翅胸前面に黄緑色の4個の点があることが特徴的である。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張平野の河口域に近い3市町村と、三河湾に近い1市で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州北部にかけて記録されている。

【世界の分布】

香港、台湾に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、河川下流域の、しみ出し水があり、常時水が数cm溜まったヨシ等の生える汽水湿地に生息する。未熟成虫は、同所的に見られる。幼虫は、浅い水域で水中の植物等につかまっている。

成虫は6月から7月にかけて多く見られ、8月には減少する。1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛西市(旧立田村)では2010年代前半には多産していたが、2019年7月の調査では1頭も確認できなかった。周辺にも本種が生息できそうな環境は残されているので、時期や場所を変えて詳細調査を行い、生存確認する必要がある。

刈谷市では2008年に産地が発見されたが、2009年に生息地のヨシが枯れ始め、2010年にはヨシの消失と共に本種も姿を消した。ヨシ原は本種の重要な生息場所となっていた。

本種は小規模な湿地でも生息できるので、どこかに生き残っている可能性はあるが、本種の生息地は埋め立て等の環境破壊と隣り合わせにあり、それが本種絶滅の大きな要因となっている。愛西市の産地は、湿地自体は残されているので何が原因で姿が見られなくなったのかは不明である。

【保全上の留意点】

- 1) 生息地である湿地の確保
- 2) 周辺域の伏流も含めた水流の変更防止

【特記事項】

本種の産地には、より大型のアオモンイトトンボが共存し、本種が同種に捕食されるのがしばしば観察されるが、本種幼虫は塩分への抵抗性を強めることでアオモンイトトンボが侵入できない水域での生息を可能にしている。

本種の和名は茨城県の潤沼(ひぬま)で採集されたことに由来する。

(吉田雅澄)

県内分布図

